

図書館によせて

理工学部長代行 教授 本田 嘉 秀

情報化時代という言葉も最早や耳新しくなくなった昨今、大学中央図書館の役割は如何にあるべきかについて、少し私見を述べてみたい。

元来、図書館はそこに多数の蔵書、資料を備え、不特定多数の人々の閲覧、貸出などの需要に応ずることを役割としてきた。このことは今も変りはないが、現在の図書館はこれだけではその役割を果たしていることにはならない。今や図書館は「情報センター」と呼ばれるようになり、大学図書館の使命は「教育」、「研究」そのものであるとさえいわれる。日進月歩というもどかしい科学の進歩は決して待っていてくれるものではないから、これらの目的を果たすためには、あらゆるテクノロジーの恩恵を受け、多数のコンピューター、ファクシミリ（テレファクスを含む）などはもちろん、衛星放送さえも利用して情報の収集、交換をしなければならないであろう。稀覯書といわれる貴重な文献、資料はそれ自身の文化的価値はもちろんであるが、それらを含めて、収蔵だけではなく、科学、文化の創造の運動体となってこそ生きるというものであろう。

どの分野でも同じことであるが、過去を理解することは現在を理解し、将来を計画するのに役立つ。情報センターとは正にこのような役割を果たすのに必要不可欠なものであろう。もとより人的にも、財政的にも、はたまた物理的にも限りあることを考えると、いかに効率的に、有用な情報センターを構築するかが肝要である。パソコン・ネットワークの進展によって研究者自身がデータベースの豊富な外部の情報センターに直接、容易にアクセスできるようになってきている。このことは研究者が自分のデスクから直接必要な情報をリ

アルタイムで入手、利用できるという点で、この上ないメリットではあるが、大学全体としての観点からは果してこのままでよいのか、どうかよくよく考えてみる必要があるのではないだろうか。

世は正に情報社会、大学とてその埒外にあるわけではない。教育、研究を使命とする大学人にとって有用な情報は文字通り血となり、肉となるものである。なればこそ、その情報センターとしての大学中央図書館によせる期待は大きいのである。これからは、大学淘汰の時代といわれる。単に生き残るだけではなくて、卓越した大学として生き残ることを考えねばならない。私自身はあまり好きな言葉ではないが、「優勝劣敗」の競争社会に生きていることを忘れてはなるまい。情報社会とは正にこのような社会である。より良き大学を目指して、中央図書館機能の一層の充実、発展を期待したい。

